

一〇、東西兩口の草分け

熱海 口

坑門口は今でこそ、其附近に、人家も建ち、梅園に杖を曳く遊覽客の足も繁くなりましたが、工事着手當時は未だ、分譲地のあるわけではなし、まあ熱海の郊外と云つた様な場所でした。水口の谷が深く入り込んで来てトンネル口の前は谷の斜面に造られた段々の田圃で、此の谷に梅園の川が流れてゐて、田圃はこゝからずつと小麥田方面にあつて、當時の熱海町の米庫でした。坑門の前にこんもり繁つた丸山の後は、沼池の様になつて居つて、川は丸山の裾を洗つてその下に深い淵が出来てゐました。休みには坑夫等が釣をやつたものです。今では、この谷も、殆んどトンネルから出た土砂で埋められ、川は丸山の疎水隧道を抜けて、其の裾に高く付け替へられて仕舞つたので、もはや當時の面影を忍ぶようがありません。

三島 口

始めて、三島口で仕事にかゝる時は、全く文字通りたけなす草を分けて仕事を始めたものです。トンネルの口は眞梨川の流れる谷で、眞梨川は丁度今のトンネル口あたりで沼澤の様になつて居りました。冷たい清流が滾々と流れて野バラやグミの木が澤山あり當時此の附近はグミの産地になつて居りグミ澤と稱してゐました。蛇も随分ゐて長い太い奴が到る處にニヨロニヨロして居りました。或時坑夫の細君がトンネルの上の山へ枯木を拾ひに行つて、大

蛇に出遭ひ喫驚して歸り病氣をしたなどの話も残つてゐる位です。何しろ蛇は澤山ゐました。

農家はあの附近に僅かに四戸で、今の床屋と豆腐屋は其當時からあつた家です。この床屋はいよいよ大竹で仕事が始まると云ふので先き廻りをして店を開き、人夫の集るのを待つて居たのです。電燈は勿論ありませんでした。大場附近にはあつたのですが、僅か四軒位の百姓家では會社が経費倒れになるので、引いてくれなかつたのです。

材料の運搬

トンネル工事に使用する諸材料は、とても大量でありますから、その運搬には、兩口共特別な施設をしなければなりません。

着手當時熱海町への陸上交通機關は、小田原を起點としたゲージ二呎六吋の輕便鐵道があつただけでありました。此の鐵道は、昔の人車鐵道の人力を、玩具の様な豆機關車に置き換へただけでありまして、マツチ箱の様な見すばらしい客貨車を引つばつて居つたのです。だから、トンネルに使用する大型機械、かさばる木材、重い煉瓦、セメント、砂等を多量運搬するには到底此の鐵道では駄目で、どうしても海運にたよる外ありませんでした。ところがトンネルの熱海口坑門は、町の西方高地、海拔二百三十呎の高い處にありますから、どうしても海岸から此の高さ迄材料を持ち上げる施設が必要でした。始めはインクライン説もありましたが、結局和田の海岸に、荷揚場を作り、それから町はづれを横切り、和田の裏山から山沿ひに二十八分の一勾配で、ゲージ三呎六吋の鐵道を敷設しました。此の鐵道は大正十四年に熱海町に鐵道が開業する迄使用してゐましたが、今日では取拂つてしまいました。

三島口の坑門も熱海口同様、海拔二百三十呎の高さですが、三島町から修善寺温泉に通ふ駿豆鐵道の大場驛から鐵道を引くのが最も便利でしたから、最初は勾配四十分の一、二呎六吋ゲージの輕便線を引いて材料を坑門口迄あげました。此の鐵道は後に現在通りゲージ三呎六吋の本線なみに改築しました。延長は丁度二哩です。

世界一の礪捨場

トンネルを掘つて出る土砂岩石のことを、俗に礪と呼んでゐます。長いトンネルを掘る場合には、此の礪の始末が問題です。三島口の方は幸にトンネルを出てから三島町におりる迄の線路が、深い谷を渡る箇所が處々にありましたから、その線路の盛土に利用出來て、礪の處分は比較的樂でしたが、熱海口の方は、かう謂う都合に行かなかつたので、どうしても礪を棄てる場所を、特別に考へなければなりません。それでトンネルの出口附近から下の方に段々田圃となつて延びて居た谷の部分、約七千坪許りを買収し、そこを流れて居つた梅園奥からの川は丸山に疎水隧道を掘つて山添ひに付替へ、此の空地に礪を棄てることにしました。今日では此の谷もトンネルから出る礪で殆んど埋まつてしまつて、坑門口にはとても高い高臺の廣場が出来ました。伊東へ分れる分岐の停車場も此の廣場に出來る事になります。此の礪棄場を町の方から仰ぎ見ると、大きな山に見え、一寸富士山の様です。水口の双栴舎に居られる坪内逍遙博士が熱海富士と命名して保存すれば、よい丹那の記念物だと、文人らしいことを謂はれたこともあります。誰かゞ世界一の礪棄場だと謂ひましたが、こんなにもたくさんの土をよく掘り出したものだと人間の力のえらいのにも感服します。

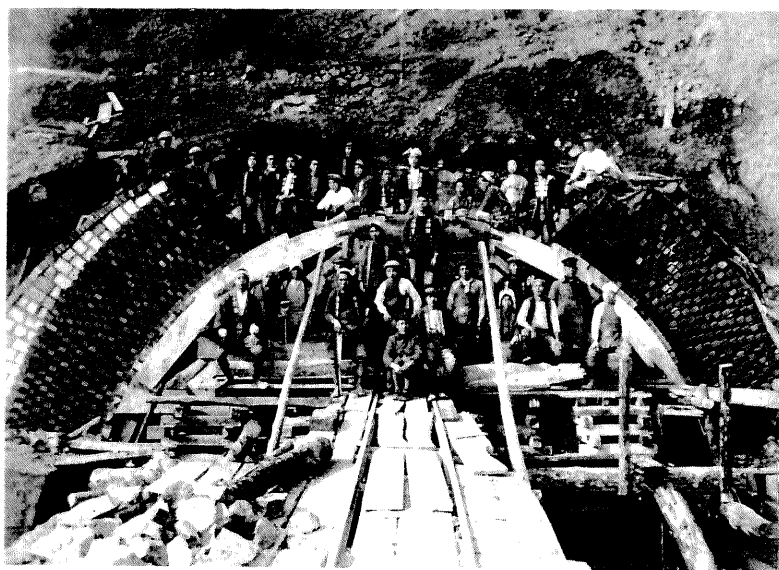
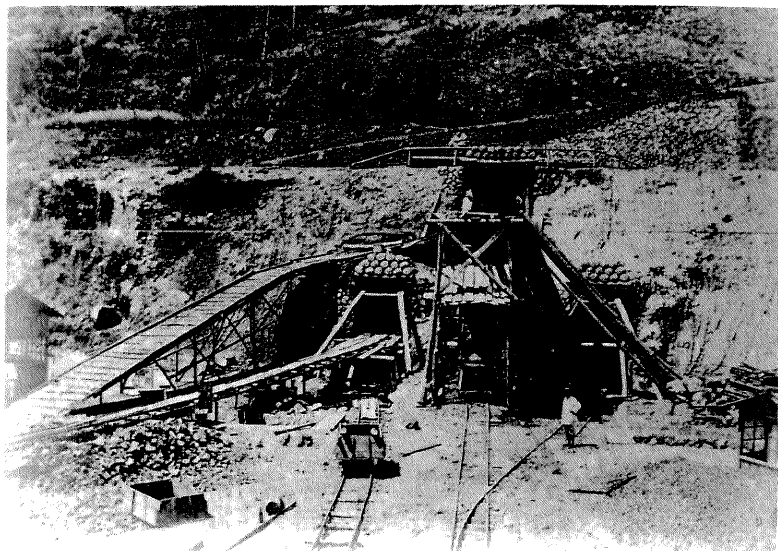
併し此の礮棄場も此頃では町の發展につれて近所に民家がたてこんだので、時々苦情の種を蒔きます。夜中に坑内から運び出した礮を空ける時、鐵製鑄トロをガンガンと叩くので、安眠妨害だとか、又冬から春にかけて空風が吹くと、礮のこぼれる斜面から、土煙がたつので、どうかして呉れとか、抗議が來ます。何れはこの捨場も整理して立派な敷地になるでせうが、以前のこの附近の様子を知つて居る者には全く隔世の感があるでせう。

工事當初の苦心

熱海口の方は、熱海温泉場が近く、土地柄が三島口の方とは大分違つてゐましたから、勞働者の住む飯場、火藥庫、倉庫等を作るにも、用地買収其他が厄介でした。其の上坑門口附近は、昔から「崩れ場」或は「クンバ」と俗稱されて居る位な處で、地質が非常に悪かつたので、此の箇所を固めるのにも一苦勞しました。

此の坑門口の悪い箇所を掘るのには、側壁導坑式と謂ふ方法を利用しました。此の部分約五鎖(三百三十呎)許りを煉瓦で巻き終るまでには、度々崩壞の危険があり中々苦勞しました。或る時などは、夜中に崩れた土が附近に在つた工手詰所まで押し出して、夜番が命からく逃げ出した事もありました。今日では一寸見ると、こんなけはひは少しも見えませんが、坑門の上を通つてゐる梅園への道なども、年の暮に逼つて崩れ落ち、櫓橋を架け渡して觀梅の御客さんを通したこともあります。

當初に於ける工事人夫の募集も、苦心の一つでした。此の邊は地方の出人夫が坑内に働くことを嫌ひましたから、勢ひ募集人夫にたよらなければなりません。此の點は熱海口の方が、土地柄から謂つて殊に厄介の様で



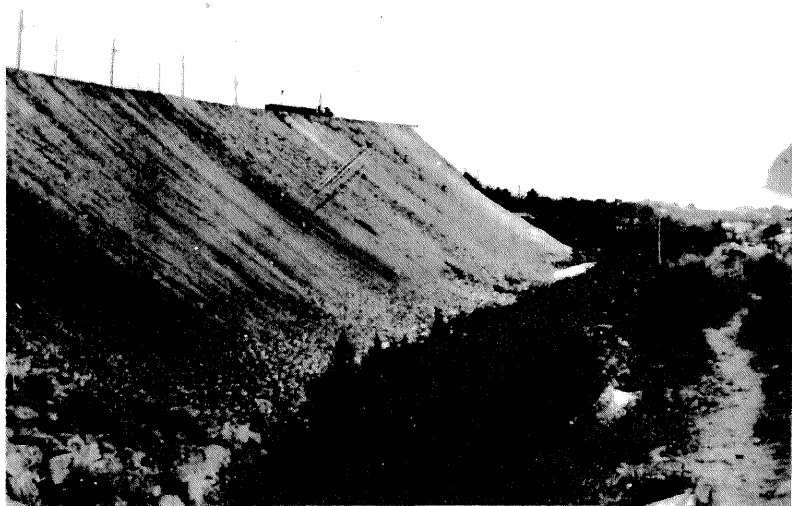
熱海口坑門の掘鑿とアーチの煉瓦巻

した。熱海口の請負者の苦心話を聞きませう。

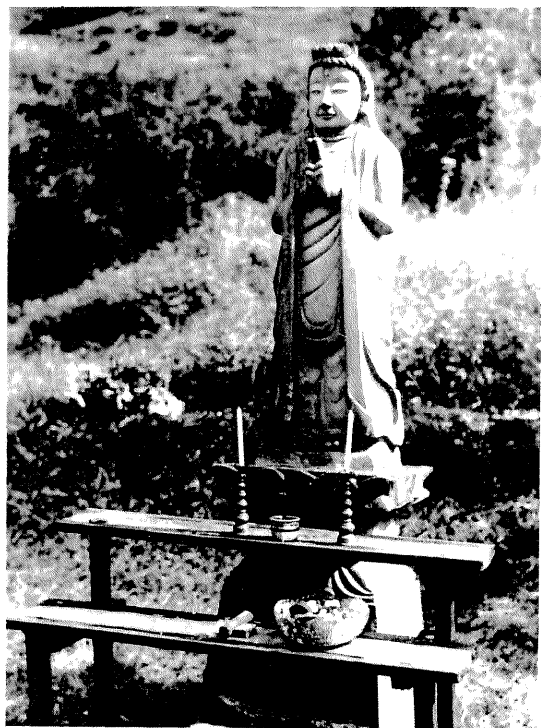
『此の頃では、丹那トンネルでも朝鮮人をたくさん使つてゐますが、始めた時分は、大部分内地人でした。丁度世界大戦の好景氣時代で、外にいくらでも仕事があるので、トンネルの様な工事に人夫を集めるのは、骨が折れました。折角連れて來ても、とかく逃げ勝て、中には借金だけ置いて失敬してしまふ者も出て來て、ひどい目にあつた親方もあります。越中方面の人夫は、辛棒強くよく働いて、貯蓄心があると謂ふので募集して見ましたが、之れも大したことはありませんでした。終ひには、監獄部屋でも作るか、囚人でも借りて強制労働でもやらうかと迄話合つたこともありました。滑稽だつたのは、當時琉球からの出稼人夫があると謂ふので、それは強いに違ひない、それに熱い國の者だから、トンネル内の暑苦しい中で働くにはよからうと、神戸方面から五六十人を連れて來ましたが、豫期に反し、坑内の作業をいやがり、それに言葉が通じないで通譯が要ると云ふ様な譯で之には閉口しました。結局三四ヶ月で退散してしまひました。人夫の足留策として色々な工夫をやつて見ましたが、懸賞福引と云ふ事やつてみた事があります。それは一月に二十日入坑すると、賞として一本の福引の權利を與へ、二十五日働くと二本二ヶ月續けた者には一本増と、謂ふ風に「くじ」の權利を與へ一ヶ月に一度引かせます。そして賞品として呉服物や種々の物をやりました。ある月に一等の當りを二百圓として現金をやりましたところが、此の一等を引き當てた者は、これに勵げみが出て尙一層の精力を出すかと思ひの外、二百圓の現金を貰ふと借金も拂はずに逃げ出して仕舞つたのには驚きました。』

當時の失敗話の一つに、熱海口で支保工材を買ひ過ぎて困つた話があります。丹那トンネルの様に複線型の大きなトンネルになりますと、支保工材も随分大きなものが必要になります。何しろこんな大型のトンネルには未だ皆経験がないので大事をとり、松丸太など未口一尺五寸もある大きなものを買ひました。下の方を切ると臼が出来る位です。熱海口の坑門個所は大變地質が悪かつたので、早く仕事をしなければいかんと謂ふので、請負者は此の部分全體の支保工を設計通り買ひ込んでしまひました。ところが、其處の工事が意外に手間取り、それに直營と請負との合の子見たいな「切り投」と謂ふ、工事を少し宛區切つて契約するやり方が禍して、折角大金を投じて運び込んだ支保工材料がなかなか使用しきれず、狭い坑門口の置場を占領して始末におへませんでした。半年たつても、一年たつても風雨に晒されて居る始末で、腐つては來るし、礫が出るにつれて仕事の邪魔にはなるし、其の都度あつちに運び、こつちに並べ、何の事はないまるで運び歩くために材料を買つた様なものです。

遂にはもう支保工材としては使へないので、二束三文で小田原の商人に賣つて了ひ、その湯屋の釜で炊かれて、はかない煙と消えてしまひました。經驗に乏しい新しい仕事では、こんな思ひ掛ないしくじりをやることがあるものです。



熱海口礮捨場



靈驗あらたかな馬頭観世音(三島口)